

金賞 小学生の部

小さな親切

袋井市立高南小学校 四年

遠藤 詩

わたしは、夏休みにお母さんのお友達と、その子どもとプールに行きました。

まちあわせの場所に行き、はじめて会うお友達をドキドキしながらまっています。

来たのは、車イスにのっけていて、お母さんにおしてもらっていた、小学校五年生の男の子でした。その子は、みっちゃんといっています。はじめて見た時のかんそうは、「え、車イスにのっているんだ。プールにいっしょに行っても入れないじゃん。」と思いました。みっちゃんはわたしと会うと、にこにこしているだけでした。そして、プールにでかけました。

プールできがえをして、水の中に入りました。みっちゃんは、きがえをしてもらい、大きなうきわの中に入れてもらい、ささ

えられながらプールに入って行きました。上半身は動くのですが、下半身はとても細くて、きん肉もなくとても細く力が入りません。自分で動かすことができないので、りょう足が水にういてしまうのです。そうすると、うきわに入っているも、前のめりになってみっちゃんの顔が水についてしまい、とてもあぶないです。自分でたすけてと言えないし、プールの流れも速いから、わたしは、せっかくだったらあんげんで楽しくあそびたいと思いました。そこで、わたしは、みっちゃんのういてしまりょう足をうかないようにもめました。

すると、前のめりで顔が水についてしまいそうだったのが、ちゃんとしせいを正すことができました。みっちゃんはこのこして、時どき「キャー」とうれしそうに声をだしていました。それを見て、わたしもとてもうれしくなりました。ただりょう足をもっていただけなのに、みっちゃんのひょうじょうがとても明るくなりよろこんでいたからです。はじめに、車イスのみっちゃんを見て、プールなんかに入れるわけがないと思っていたじぶんが、とてもはずかしくなりました。

体にふ自由があっても、わたし達と同じように気もちはあるし、こわくないようにたのしくあそびたい気もちはあると思います。どうぐを使ったり、工夫をしたり、人の力をかりたり、ささいなことだけど手をかすことか、気もちをわかうとす

ることで、その人のもっている力をたくさんひきだすことができるんだなと思いました。

きょうは、親切をしようとしたわけじゃなくて、わたしがみっちゃんと、プールであんぜんにたのしくいっしょにあそびたいという気もちが、しぜんとしんだのではないのかなと思いました。親切は、相手がどう思っているかをしようとしているのか、なにをのぞんでいるのかの気もちを考えることができればしぜんと生まれるもので、思いやりの気もちがあればだれにでもできることだと思います。さいごに、みっちゃんは、りょう手で大きくバイバイをしてくれました。

弟に気づかされたこと

静岡市立長田東小学校 六年

室伏 好誠



ぼくには、八才はなれた弟がいる。正直、とてもとてもかわい。一緒に遊んでいると、笑いが絶えない。でも、一つ困ったことがある。それは、何でも拾ってしまうことだ。

「コラー。何をやっているの！」

これは、つい最近ぼくが言った言葉だ。

ぼくは、母にお使いを頼まれ、近所の無人販売まで弟と一緒に出かけた。

今年の夏は、いつもに比べ異常に暑い。アスファルトの地面が熱せられたフライパンのようだ。汗が滝のように流れて止まらない。早くお使いを済ませ、エアコンのきいた涼しい部屋に戻りたくて、弟の手を強く引いた。

もう少しで、無人販売に着くという時のことである。弟は、今までつないでいたぼくの手を振りほどき、座りこんでしまった。そして、何かを拾いあげた。

「もう。だめねえ、ポイしちゃー！」

と言って、手の中にあるものを見せてくれた。それは、タバコの吸いがらだった。誰が口にしたのか分からないタバコを、何のちゅうちよなく拾った弟に、ぼくは「何をしているの！」と叱ってしまった。すると、

「ポイしちゃいけないんだよ。きたないでしょ！」

と逆に叱り返されてしまった。

思い返すと、弟は今回だけではない。今までも、気が付くとゴミを拾ったりして、父や母にわたしている。

ぼくはハツとした。ゴミをポイ捨てしていく人が悪い。でも、そのまま見過ごすのもどうなのだろうか。町のクリーン作戦な

どの時は、一生けん命拾うのに、そうでない時は見て見ぬふり。これで良いのだろうか？

答えは違うに決まっている。誰か気づいた人が拾ってゴミ箱に入れたら良いだけなのだ。そんなことを、八才も年下の弟に気づかされた気がした。

当たり前だが、ゴミは持ち帰る。落ちていたら拾う。まずは目の前のことから。小さなことの積み重ね。気づかいが大切なのだと思う。

みんなゴミが落ちているような町より、きれいな町の方が良いに決まっている。家の外だけでなく教室でもそうだ。『ゴミが落ちている。誰か拾ってくれるだろう。』ではなく、気が付いたらちゅうちよなく拾って、ゴミ箱に入れられるような人間でありたい。

もしも、ゴミを拾っているぼくを見て、前のぼくのように「何やっているの！」と言う人がいたら言ってみよう。

「ゴミが落ちていない方が、気持ちがいいでしょ。」

わたしにもできたよ

浜松市立佐鳴台小学校 一年

山崎 蘭

わたしには、四人のおにいちゃんがあります。上三人のおにいちゃんとは、としがはなれているので、なんでもわたしのいうことをきいてくれるし、とおくにおでかけしたときは、かならずおみやげをかってきてくれます。

わたしがわがままをいってないとき、おかあさんに、「らんちゃんは、すこしわがままだよ。」

といわれてしまいました。おとうさんにもいわれるときがあります。でもおにいちゃんにはいわれたことはありません。

なつやすみにはいっておかあさんに、

「おかあさんのともだちが、あかちゃんをつれてうちにあそびにくるよ。らんちゃんはおねえさんだからやさしくしてあげてね。」

といわれました。わたしは、

「わかったよ。」

といました。

つぎのひ、あかちゃんがうちにきました。八かげつのおとこのことです。まだたてないからハイハイして、わたしのうしろをついてきました。わたしのいえには、あかちゃんがいなし、いっしょにあそんだことがないのでどうしたらよろこんでくれるのかな。とかがえました。そのこのおかあさんが、

「そのキャラクターがすきなんだよ。」

とおしえてくれました。わたしは、いえにあるそのキャラクターのグッズをみせてあげました。とてもよろこんでくれました。

そのあといっしょにプールにはいりました。プールにあしがつかないので、わたしといっしょにうきわにのって、うきわからおちないようにだっこしてあげました。プールからでて、おひるごはんをいっしょにたべました。あかちゃんは、ふつうのしよくじはたべられないので、たべものをすりつぶしてあげました。

ごは、テレビをみました。わたしの大きなテレビばんぐみでしたが、あかちゃんがわたしのまえにきてジャマをしてきました。わたしは、なきそうになりましたが、おかあさんにいわれたことをおもいだしました。「やさしくしてあげてね。」ということを。なみだをぐつとこらえて、あかちゃんもってきなおきにいりのおもちゃでいっしょにあそびました。

さようならのじかんにになりました。あかちゃんのおかあさん

に、

「やさしくしてくれてありがとう。さすがおねえさんだね。」
といわれました。おかあさんにも、

「えらかったね。」

といわれました。

(しんせつとは、あいてのことをかんがえて、なにをしたらよろこんでもらえるか、じぶんになにができるかかんがえて、
こうどうにうつすことなんだ。)

ときづくことができました。これからは、じぶんのことばかりではなく、あいてのきもちもかんがえたいとおもいます。



金賞 中学生の部

ゴミのない道路

静岡市立東豊田中学校 二年

植田 晴名

これは、私が自転車に乗って家に帰る途中に起きた出来事です。角を曲がった瞬間、鼻に「ツン」とくる異臭がしました。何かと思い、辺りを見るとゴミ捨て場の近くで、ゴミが散乱していたのです。そのゴミが、車道と歩道にも散らばっていました。生野菜や、納豆などたくさんのゴミがあつて、とても気分が悪くなりました。このような気持ちには、他の人がなつてほしくなかつたので、一生懸命片付けました。片付けている中、自動車に乗っている人、自転車に乗っている人、様々な人にじろろ見られてしまい、とても恥ずかしい思いをしました。（私がやったわけではないのに、なぜこんな思いをしなければいけないのだろう。）

そう考えてしまいました。そして私は、片付けを半分やらない

で帰ってしまったのです。

私は、そのときとても腹が立っていて、お母さんに相談したのです。

「善意のつもりでやったけれど、とても嫌な思いをした。私のしたことは間違っていたのかな？」

お母さんはこういいました。

「晴名のしたことは間違っていない。けれど、周りの人たちは興味本位で見ってしまうことが多い。いい事をするには、それなりのメンタルが必要だ。」

と。

いい事をするのは、とても大変だと気がつきました。確かに、私も近くの人が道路に散らばっているゴミを拾っていたら、見してしまうと思います。

しかし、一回私は逃げてしまつたけれど、もう一度ゴミを拾おうと思ひ、そのゴミ捨て場へ行きました。なんと、もうゴミは全て片付けられていたのです。良かったような、悲しいような、そんな気持ちでした。最後までやらなかつた後悔が私を襲いました。

こんな思いは、もう二度とたくありません。もちろん、他の人にも味わってほしくありません。いい事をするのは素晴らしいことだけど、それなりのメンタルが必要だということを知

り、これからは、中途半端でやめないで、最後まで責任を持って行動するようにします。また、周りの目を気にすることは大事だけど、気にしすぎてしまうと、自分の思う様に出来ないことが分かりました。「自分がしたほうが良い」と思ったら、多少周りから変な目で見られても、気にしないような人になりたいです。まだ、周りの目を気にしすぎてしまい、思うようなことが出来ないことがあります。早く慣れて出来るように頑張ります。この出来事は、私にとってとても良い経験になり、私の考え方を大きく変えてくれました。

親切くあなたがいてくれてよかった

静岡市立安東中学校 三年

岡村 蒼真

親切とはどういうことなのだろうか。自分から困っている人に手を差し伸べてあげることなのか。私には、それだけでは無いということを感じた出来事がある。

一人で買い物に来ていた休日のことである。買い物が進み、帰ろうとして、エレベーターの前に来た時だ。壁のボタンの前に一人背中をまるめたお年寄りが、たくさんの荷物を抱えたま

ま、何かカバンの中から取り出そうとしていた。たくさんの荷物を持っていたということ、背中をまるめた老人ということ、なかなか取り出すことが出来ず、困っていたように見取れた。私は、勇気を出して、

「お荷物お持ちしましょうか。」

と声を掛けた。それに対してその人の答えは、

「これくらい人の助けなしで出来るから、今自分でやろうとしているじゃないか。」

だった。まさかの返答に私は何も言わず、ただ目を見開いていた。

その後、家に帰る時もそのことを考えていた。最初のうちは（せっかく声をかけてあげたのに何てことを言うんだ）と腹を立てていた。しかし、時が経つにつれ、おじいさんなりの考えがあったのかもしれないと思うようになった。そして、私の考えは、この結論に至った。「自分は時間はかかるけど、一人で出来るから頑張りたい。」とおじいさんは思ったかったのではないか。

そういえば、体の不自由な私の祖母が、階段を上りながら「これもリハビリ。」と言っていたことを思い出した。祖母は、自分で出来ることは、人の助けなしで頑張りたいのだ。今思うと、あの老人は祖母と同じ気持ちがあったのかもしれない。

それから私は、親切とは何なのだろうと考えるようになった。

後日、このような体験をした。以前と同じように、たくさんの荷物を持ったおじいさんが何かを取り出そうとしていた。その光景を目のあたりにして、以前のこともあったため、声をかけようかと悩んでいた時だ。近くに立っていた一人の青年に、おじいさんは、

「悪いけどお兄さん、持っていてくれるかね。」

と頼んでいた。青年はその頼みをすんなりと聞いて荷物を持った。そして最後に、たくさんの荷物をまとめて持ちやすいようにしていた。二人とも嬉しそうな笑顔になったのだ。

かつて私の親切の概念は、弱者を助ける行為だった。しかし、親切をあの人に断られたことで、私は親切とは何かと考える機会を得た。「助けなくては」と思うこと、その根本には少なからず義務感が漂っていたのだろう。義務感からは、人間の持つぬくもりは伝わりにくく、自己満足のための行為に陥りかねない。自分の行いで相手が喜んでくれる、そしてその姿に自分もまた喜ぶ、というのが温かい心のキャッチボールではないだろうか。「ボランティア」の本来の意味「自発的」にたちかえり、対象を弱者と定義せず周囲の方に喜んでもらえる行いを自らしていきたい。「あなたがいてくれてよかった」と相手に感じてもらえることが、真の親切だと思うから。

幸せの輪

静岡市立安東中学校 一年

吉田 成美

「ベビーカーを持っておきましょうか。」

お父さんが手荷物と赤ちゃんを両手にだっこした女性の方に声をかけた。

これは、私とお父さんが旅行中の新幹線から降りようとした時の出来事だ。女性の方はベビーカーに手荷物を置こうとしていた。しかし、赤ちゃんを抱えながらだと、ベビーカーが動いて、なかなか手荷物が置けず困っていた。私もその事に気づいていたが、声をかける勇気が出ず、見ていただけだった。その時、お父さんが声をかけた。女性の方は嬉しそうに、

「有り難うございます。」

と答えた。私は、お父さんはとっても優しいと思った。だから、新幹線を降りた後、私は思わず、

「パパ、優しいね。」

と言うと、お父さんからは、

「優しくなんかないよ。困っている人を助けただけだよ。」

との答え。これを聞いた私には二つの感情が芽ばえた。一つは、自分から声をかける事が出来なかったのが情けないという気持ち。もう一つは心がポカポカした気持ち。お父さんが格好良く見えた。だから、私は「そんな格好良いお父さんの姿を真似しよう」、「小さな親切を私もしてみよう」と心に誓った。

数日後、その誓いを実行する時がきた。

私が自転車に乗って習い事に向かう途中、道路にたくさん紙が散らばっていた。誰が落としたかは分からない。今までの私なら、自転車を止めるのは面倒だから、習い事に遅れるから、と自分に言い訳をして、そのまま通りすぎていただろう。でも、今回は数日前の誓いを思い出した。だから、私は自転車から降りて散らばっている紙を拾いだした。すると、それを見た他の通行人の方が手伝ってくれた。一人は大人の女性の方で、もう一人はサッカーボールを持った男の子だった。男の子はこの後、遊びに行くつもりだったのだろう。でも、一緒に紙を拾う事を優先してくれた。私は嬉しくなった。あの時、お父さんが私に良い影響をあたえてくれたように、私も今回、少しは格好良いお父さんみたいになれたと思った。散らばった紙を自分から拾って良かったなと思った。

この二つの出来事から、私は小さな親切には「大きな力」が二つある事を感じた。

一つ目は一人の小さな行動でも、他の多くの人を幸せに出来るという力だ。私はお父さんの「小さな親切」を見て、心がポカポカした。小さな親切は親切をされた人はもちろん、それを見ていた周囲の人も嬉しい気持ちになる。また、紙を拾って良かったと思えた様に、親切をした自分までも幸せな気持ちになれる。

二つ目は「小さな親切の輪」を広げていく事が出来る力だ。小さな親切をしているお父さんを見た私が、後で小さな親切をする。それを見た周囲の人が手伝ってくれる。小さな行動だからこそ、誰にでも出来る事だからこそ、「小さな親切の輪」は「幸せの輪」となって広がっていく。

だから私は、これからも小さな親切を行って、周りに幸せの輪を広げていきたい。



銀賞 小学生の部

笑顔になってもらえる事

富士宮市立北山小学校 五年

植松 歩太

ぼくのおばあちゃんは認知症という病気です。物忘れがひどくなってしまっています。おばあちゃんとは一緒に暮らしていないので、土曜日や日曜日の学校がお休みの日に会いに行きます。ぼくが会いに行くと必ず聞いてくる事があります。

「歩太、今日は学校はお休み？」

だからぼくは、

「おばあちゃん、今日は日曜日だよ。」

こんな風に、おばあちゃんは曜日を忘れてしまっています。また、このやりとりを五回くらいします。ぼくは、おばあちゃんの病気の事が初めは分からなくて、

(何回も同じ事を言ってきて面倒だな。)

とあって、ちょっとときつい言い方で、

「おばあちゃん、それ何回目？しつこいよ。」
と言ってしまった。その時のおばあちゃんの顔は悲しそう
で、

「ごめんね。何か頭がへんになったみたい。」

とおばあちゃんは言いました。ぼくはその時、自分が何である
な言い方をしてしまったんだろうと、すぐ後悔しました。そ
れを見ていたお母さんに、おばあちゃんの病気の事や、どうし
たら良いのかを教えてくださいました。子供のぼくにできる事は、
とても少ないけれど、話をたくさん聞いてあげようと思いまし
た。

だから、今では何回も同じ事を話してくるおばあちゃんに、
何回でも何十回でも聞いてあげて、ちゃんと答えてあげます。
もうおばあちゃんに悲しい顔をさせたくないからです。

おばあちゃんは、歩くのも大変になってきているので、スー
パーと一緒に買い物に行く時は、おばあちゃんの買物リストの
メモをぼくがもって、手をつないでゆつくりと買物をします。
おばあちゃんは少し歩くと、

「歩太、豆買った？」

と聞いてくるので、ぼくは、

「おばあちゃん、買ったよ。」

と答えて、かごに入っている豆ふを見せてあげます。こんなや

りとりが、スーパーを出るまで何回もあります。ちょっと面倒だなと思ってしまいますが、ぼくが答えてあげるたびに、おばあちゃんが、

「歩太、優しいね。ありがとう。」

と笑顔で言ってくれるのが、とてもぼくはうれしいです。ぼくがおばあちゃんに小さな親切をすると、ぼくの心は、大きな幸せでいっぱいになります。これからも、もっと物忘れがひどくなってしまうと思うけど、いつまでもおばあちゃんのとらなりで小さな親切をしようと思います。

自分ではないだれかのために

静岡市立清水入江小学校 三年

高田 莉彩

わたしは、家のむかえのおばちゃんとなかよしだ。そのおばちゃんは、いつもニコニコしながら、わたしに声をかけてくれる。学校の帰りに会った時など、いっしょに歩きながら、いろいろな話を聞かせてくれる。おばちゃんは犬をかっていて、そ

のさん歩中のできごとを話してくれた。

その日、おばちゃんはいつものように犬のさん歩をしていると、遠くでたおれているおばあさんを見つけた。だれかに知らせようと思ったけれど、まわりにだれも見当たらなかつたため、自分が走ってかけつけたという。早くしなければ、そのおばあさんはたすからないと思い、ひっしで走ったそうさ。そのおかげでおばあさんはたすかつたけれど、おばあさんは走つたせいで心ぞうがいたくなつてしまつたらしい。おばあさんは、心ぞうが弱かつたのだ。

おばあさんは、自分の心ぞうが弱いとわかつていながら、なぜ全力で走つたりしたのだろう。わたしだったら、自分の心ぞうの方が大事で、われをわすれて走るなんてできないかもしれない。でもおばあさんは、たおれているおばあさんを見つけた時、「思わず」走つてしまつたのではないか。自分の心ぞうの事より、おばあさんをたすけたい気持ちが、しぜんにおばあさんの体をつき動かしたのだろう。

わたしは、心ぞうがいたくなつてしまつたおばあさんの事は心ばいだったけれど、おばあさんをむ中でたすけようとしたおばあさんが、何だかカッコいいと思つた。もしわたしなら、自分の事より先に人の事を考えることができるだろうか。わたしは、だれかのためになりたいと思つても、まず先に自分のつご

うを考えてしまう。「今、時間がないから」というのは、やっぱりいいわけなのかもしれない。おばちゃんはいつも「親切にしよう」と思っているのではなく、おばちゃんの心にしみついているやさしい気持ちで、しぜんに親切につながっているのだろう。

「親切」は、「やろう」と思っているのではなく、人が自分ではないだれかの事を大切に思った時、はじめてできるのではないかな。自分のためだけだとげんかいがあって、そこに「だれかのために」という事がくわわると、人はもつとがんばれるのかなと思った。

おばちゃんは夏、心ぞうの手じゅつをして、元気になって帰って来た。またいつものように、ニコニコしながらわたしに声をかけてくれる。これからも、たくさんおばちゃんの話聞きたいと思う。そしてわたしもいつか、「自分ではないだれかのために」になりたい。

ピンクの心、はい色の心

浜松市立新原小学校 五年

松野 叶依

わたしは、友達と鹿島の花火大会に行きました。その日の花火大会は、九時ごろに終わりました。だから、一年生のわたしの妹と友達の妹はともねむそいで、大きなあくびをたくさんしていました。

その日、花火大会が終わった後は電車で帰ることにしました。電車に乗って帰る人はとても多くて、あまり経験したことがないくらいに、長い行列ができていました。ねむくてつかれていたら一年生は、とても待ちきれないような状態でした。けれど、待たなければ電車に乗ることができないので、がまんをして待つことにしました。

その時のことでした。わたし達より少し後ろの方で、

「早く、ここから通って。」

「こうなったら、割りこみ作戦しかない。」

という声が聞こえてきました。一年生や一才の小さい子までならんで待っているのに、高校生くらいの女の子の人達が六人ほど、

わたし達をぬかしてぐんぐんと前の方へ進んで行くのです。私は頭の中で、

(小さい子だつてがまんしているのに、なんで高校生ががまんできないの。)

とずっと思っていました。その時はわたしもつかれていたら、周りのみんなもつかれていたと思うのではらが立ちました。

その出来事から三十分ほどして、なんとか電車に乗ることができました。車内はとても混んでいて、すわる席は一つも空いていませんでした。その時、大学生くらいの女の二人が席をゆずってくれました。だから、一年生の二人が席にすわりました。私は、その人達とは何の関係もないけれど、その人達がとても好きになりました。電車に乗る前に、わたし達をぬかしてきた人達の心はいい色で、席をゆずってくれた人達の心はピンク色だなあと思いました。

電車の中でお母さんが、

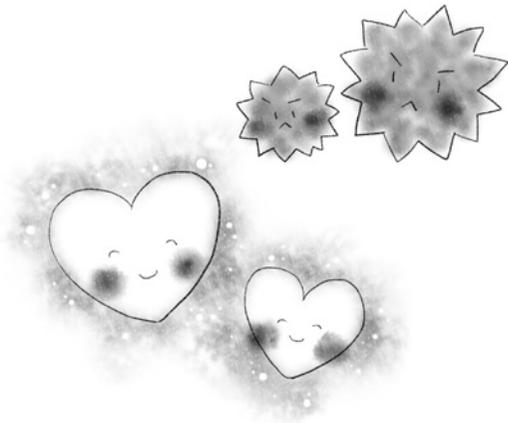
「世の中は、良い人ばかりでもないし、悪い人ばかりでもない。

けれど、自分がどんな人になるかは自分しただよ。」

と言っていたので、わたしはピンク色の心をもっている親切な人になりたいです。

わたしは、心がピンク色の人とはいい色の人に出会ったことで、とても良い勉強になったと思います。

わたしは、ルールを守って、周りの人のことを考えて行動することができるような人に成長していきたいです。そして、自分の心の小さな親切をもっと成長させ、周りの人達にこの子は素晴らしいと思ってもらえるような努力をしていきたいです。



銀賞 中学生の部

本当の親切

静岡市立南中学校 三年

上倉 華倫

「親切」とは、思いやりが深く、ねんごろなこと。好意をもって人のためにあれこれと計ってやること。尽くすこと。親切の意味を調べるとこのように出てきます。ですが、親切とは、ただ尽くすだけではないと思います。

私が小学校六年生の頃の体験です。六年生になると、一年生とペアになります。私とペアになったMちゃんはとてもおとなしくマイペースな子でした。外で遊ぶのもあまり好きではなさそうでした。私とは正反対の子です。私はそんなMちゃんに幼稚園とは違った外の楽しさを知ってもらいたくて、晴れている日はよく外に出て遊びました。大きなジャングルジムにのぼって、大きなすべり台を滑ったり、私の得意な鉄棒でみんなができないような技を見せてあげたり、縄跳びではやぶさを見せた

りました。Mちゃんは「すごいね。」と言って笑ってくれました。私もそれがとてもうれしくて、遊ぶ度に色々なことをしました。外の楽しさを分かってくれたと思っていました。ですが、後期のはじめ頃に私は気づきました。Mちゃんは、私が「外に行こう。」と言わないかぎり外で遊ばないのです。クラスの子と遊んでいるとき、運動場でMちゃんの姿を見たのは、全校遊びやクラス遊びなどの、ほぼ強制的に外へ出るときだけです。だから、私はMちゃんと遊ぶときに思いきって聞きました。

「何して遊びたい？」

するとMちゃんは少し悩んで、

「絵本読んで。」

と言い、私に絵本を差し出しました。

「うん。いいよ。」

と言って、私は絵本を読んであげました。こんなことをしてあげたのははじめてでした。私は外で遊ぶのは楽しいから、Mちゃんも楽しいのだと思っていました。でもそれは違って、Mちゃんがしてほしかったのは、すべり台でも鉄棒でも縄跳びでもなく、絵本を読んでもらうことだったのです。「相手の気持ちを考える。」それができているのは、六年生の私ではなく、一緒に外で遊んでいた一年生のMちゃんでした。半年間も一緒にいて気づけなかったことが悔しく、Mちゃんに悪い気持ちで

いっぱいでした。それからは必ず「今日は何をしようか。」と聞きました。時々Mちゃんが自分から「外に行く。」と言うと、気をつかっていないか不安にもなったけど、Mちゃんが望むことだから外に出て遊びました。それからは、Mちゃんの声を聞くことを大切にするようにしました。

親切とは、ただ自分の思ったように人に尽くすのではなく、相手がしてほしいことを聞いて考え、相手に尽くすことが、本当の親切だと六年生の頃分かりました。中学では相手の声を聞くことを大切に生活しています。これからも続けていくようにし、親切の本当の意味を忘れないようにしたいです。



曾祖母からの小さな親切

常葉大学附属菊川中学校 二年

佐藤 大翔

「大ちゃんこれ食べな。これもおいしいよ。」

「ばあちゃん、欲しかったら自分で取るから気にしなくていいよ。」

去年くらいまで父の実家に帰省した際には、食事のときよくこんな会話がされていた。久々に会うひ孫に、曾祖母は沢山世話を焼きたかったようで、食卓に並んでいるおかずを次々とすすめてくれた。ぼくは、何も言えず黙っていると、祖父たちが彼女をなだめてくれた。彼女からしたら親切、けれど周りから少しおせっかいと取られがちな行動。僕が物心付いた頃からだから、それはきつと十年近く続いていた。しかし、去年あたりからそんなことがなくなつた気がする。僕が大きくなつたからだろうか。いや、きっと違う。

僕には、遠く離れて住んでいる九十歳を過ぎた曾祖母がいる。一年に二度ほどしか会わない曾祖母は毎年会うたびに背中が曲がっていき、目に見えて歳を取っていくのが感じられる。外出

こそあまりしないが、家の周りを散歩したり、庭の畑にいったりして元気な人だった。僕は核家族で育ったせいかわからなかった。曾祖母くらい歳の離れた人と、どんな話をしていいのかもさっぱり想像がつかなかったし、何かして欲しいことがあっても、滅多に会わない人をお願い事をする勇氣もなかった。今思うと、曾祖母はいつもニコニコ優しい顔で僕のことを見ていた。普段会わないひ孫のすることに興味があるのかと思っていたが、きつと彼女は僕が話しかけてきたり、何か頼み事をしてくるのを待っていたのかもしれない。深く考える必要はなく「今日暑いね。」や「ばあちゃんって何歳だっけ。」そんな何気ない言葉で良かったんだろう。

今年の夏、お盆に父の実家に帰省し、曾祖母に久しぶりに会った。曾祖母は、僕のこと全くわからなくなっていた。去年あたりから認知症が始まっていて、症状は進んでいた。それが彼女が僕に世話を焼かなくなった理由だった。毎日一緒にいる祖父や祖母のことはわかっていても、久しぶりに会う僕や父、妹のことはお客さん、いや、ただ訪ねてきて一緒にご飯を食べている人たちくらいな感覚だったのだと思う。曾祖母はもくもくと食事をし、僕におかずをすすめることはなかった。昔は何も出来なかった僕が、彼女の今の姿にもすごく寂しさを感じた。

今思えばなぜ僕は、曾祖母の親切に言葉すら返せなかったんだろう。曾祖母が親切にすすめてくれたおかずを素直に「ありがとう」と受けることが出来なかったんだろうと思う。そして僕のこと分からなくなってしまった曾祖母に、僕はそんな親切を返せるだろうか、自宅に帰ってくる車の中で考えていた。

小さな小さなプレゼント

浜松市立西部中学校 三年

野崎 径嗣

私には、五歳になる弟がいます。とても人見知りですが、家の中ではとても威張っています。正直、生意気です。しかし、この夏休みから様子が変わってきました。おやつ時間の出来事です。

「お兄ちゃん、あげる。」

と言って、自分のお菓子を分けてくれるのです。それは、とても小さな小さなチョコレートのかけらでした。最初は、
(これだけなの。)

と思い、

「要らない。」

と言ってしまった。すると、とても悲しい顔をして機嫌が悪くなっていました。後で母に聞いたところ、幼稚園で、友達と分け与えることの大切さについて学んでいたそうです。そういえば、私が幼稚園生のときに、友達とおもちゃの取り合いをして、嫌な気持ちになったことを思い出しました。そこで、今度、弟が同じことをして来たら、素直にもらおうと決めました。

次の日、やはり弟が、

「これ、あげる。」

と言って、私によこしてきました。今度は、スプーン一杯のヨーグルトでした。私は素直に、

「ありがとう。」

と言って食べました。その時の弟の表情はともうれしそうで、照れていました。

さらに次の日、今度は、かりん糖二個に変身して、プレゼントしてくれました。私は、

「うれしいな、おいしいね。」

と言葉を付け加えました。すると、今度は、一人でダンスをしていました。うれしい感情の表現だったかもしれません。

なんとなくですが、小さな親切に対して、感謝の気持ちを伝えると、だんだん大きな親切につながっていくのではないかと思い始めました。私も、杖を突く祖父を介護する時、祖父は大きな声で「ありがとう。」と言ってくれます。その言葉を求めているわけはありませんが、言われるとやはりうれしいです。それだけでなく、また親切なことをしたいと思います。親切にしたいと思う気持ちや行動は、感謝の言葉で大きく育っていくのかな、と生意気に思っていました。

もし、親切なことをされても、多くの人が無視したり、嫌な顔をしながら反応すると、どのような世の中になってしまうのだろうか。小さいことから始めた親切が、育たなくなってしまうのではないか。極端かもしれませんが、自分だけ良ければよいと思う人が増えてしまうのではないかと思えます。小さな親切が大きくなるように、その親切にしっかり応えることが必要ではないか。皆がそれをできれば、お互いが助け合える世の中になるのではないのでしょうか。すると、災害があっても、寄付金が増えたり、ボランティアの方が増えたりする素晴らしい世の中になるのではないのでしょうか。私は、小さな弟からの小さな小さなプレゼントをもらって、親切について大切なことを教わりました。